

驚きの連続 : 追悼・中村哲

仲程, 昌徳 / NAKAHODO, Masanori / ナカホド, マサノリ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

282

(終了ページ / End Page)

284

(発行年 / Year)

2004-08-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015955>

驚きの連続 — 追悼・中村哲 —

仲程 昌徳（琉球大学教授）

朝早く、赤い色がないので買ってくるように、という電話があつて、沖映通りにあつた絵画用材店に駆け込んだ。店主に、赤い色が欲しいというと、赤は赤でも何十となくあるのだが、という。驚いたのは私である。赤は赤だとしか思っていなかったのである。それほどに絵画に疎い私が、中村哲の絵を描く現場にいた、というと格好いいが、傍でうろろろしていたのである。

大里、知念、喜如嘉、久高、具志川とすぐに思い出される場所での一駒一こま。風が強いだけでなく雨も降ってきて大変だったこと、お正月なのだからどうぞと絵を書いている近くの家に招かれてご馳走になったこと、奥さんと一緒に奥の部落を廻ってくる間に描き終えた絵をそのままにして、近くの石段でズボンを脱ぎ、ステテコ姿で寝て居られたこと、宿に戻って、一盃いこうということで、酒の肴をお願いしたら、フクシンづけが出てきた離島の民宿のこと、そのどの一駒一こまも驚きとともにある。

『中村哲作品集』の「作品一四」の絵は、真夏、今はもうなくなってしまった字具志川の闘牛場で催された、まだあまり名の知られていない闘牛たちの戦いを描いたものだ。何度も、後ろのあんちゃんたちから、邪魔だ邪魔だと怒鳴られながらも頑張ったことで忘れがたいものがあるが、後一つ忘れがたいことがある。朝から頑張っていて、昼飯をどうしようかということになった。絵の前を動かさくないということで、近くの店まで走っていったが、弁当なる

ものがなく、カップラーメンを仕入れてきたのである。それをあっというまに平らげてしまわれた。

そういえば、中村哲は、健啖だった。昼食や晩飯を何度となくご一緒したが、口から戻るものがないばかりか、ことごとく出てくるものを平らげておられたのである。そして、弁舌さわやか、というのとは違うが、独特のだみ声で、洋の東西にわたる話で夜の空けるのも知らぬふうだった。

中村哲には、幾度となく驚かされた。

近代文学館から普通なら東北沢の駅に向って帰るのを、その日は、下北沢の駅に抜けようとして細い道を歩いていた。黒塗りの車が側を通り抜けて行って止まった。車の窓から顔を出したのは中村哲だった。私は、不思議な思いで、じっと見つめていた。というのも、近代文学館で、戦後すぐに発刊された雑誌類を調べていて、中村哲の名前が次から次へと出てきて、圧倒されていたからである。

自宅から国会へ行く途中だということであったが、私は、あまりの偶然にぼんやりして、敗戦直後発表していた論考の掲載された雑誌の数々を、今、見てきたばかりだと申し上げることすら忘れていた。

敗戦直後発表なされた論考がどのような意味をもつものであるか、専門外の私に分かるわけも無いが、中村哲のあの談論風発のよってきたる第一点は、そこにあったのではないかという感をいなめない。

雑誌を調べていると、中村哲の名前を幾度となく見るようになる。これまた事情を知れば、納得のいくことであるが、台湾で刊行されていた雑誌で、その名前を見たときには驚いた。中村哲は『文芸台湾』『民俗台湾』等の編集委員でもあったのである。

「島の心」と題した張文環を追想した文章のなかで「一頃の『台湾文学』は植民地における日本的なものを郷愁としていた『文芸台湾』とは違って、大稲埕の中の一種のサロンで発行していたもので、当時の人脈からいえば、台北大学では金関丈夫さんと私などが近く、『民俗台湾』の同人たちがそうであった」（『張文環先生追思録』民国六十七

年)と書かれていたが、この一文からでも台湾で刊行されていた雑誌と中村哲は色々に関わっていたことが伺えるし、その名前が随所にでてくるのは不思議でもなんでもなかったのである。

ご専門の分野とは別に、中村哲は、民俗、文学にも並々ならぬ関心を寄せておられた。そのことについても書いておきたいことが山ほどあるが、書き出すと切りがなくなる。いつも驚かされたが、いまもって驚かされている大きな人だった。そのような人を呼ぶのにふさわしい呼び方として「中村哲」しかなかった。合掌。